

松尾周子先生記念

2005年11月20日

(終末主日)

されど

神は愛なり



1955年(昭和30年)滝野町教会堂竣工

西脇みぎわ教会

詩篇 第23篇 —ダビデの歌—

主はわが^{ぼくしや}牧者なり、

われ^{とも}乏しきことのあらじ。

主はわれをみどりの^の野にふさせ、

いこいの^{みざわ}汀にともないたもう。

主はわが^{たましい}魂を活かし、

御名^{みな}のゆえをもて、我^{ただ}を正しき^{みち}道にみちびきたもう。

たといわれ^し死のかげの^{たに}谷をあゆむとも、

わざわいをおそれじ。

なんじ我と共にいませばなり、

なんじの^{しもと}筈、なんじの^{つえ}杖、われをなぐさむ。

^{なんじ}汝、わが^{あだ}仇のまえに

わがための^{えん}宴をもうけ、

わが^{こうべ}頭に^{あぶら}油をそそぎたもう、

わが^{さかずき}酒杯はあふるるなり。

わが^よ世にあらんかぎり、かならず^{めぐ}恵みと^{あわれ}憐みと我にそいきたらん、

われはとこしえに主の^{みや}宮に^す住まん。

(日本聖書協会文語訳)



園挙げて90歳の誕生日を祝った日
(2004年10月13日)

前夜式次第

司 式・神原かよ子
奏 楽・内 田 純 子

前	奏	——	黙 禱	——	
讃 美 歌	90番 (園・讃美歌)		—		同
聖 書 朗 読	詩篇90編 1～12節		司 式		者
祈 禱			〃		
讃 美 歌	359番		—		同
式 辞	「おのが日を数える」		牧師 新 里 昌 平		
祈 禱			〃		
追 憶			西脇教会牧師 中 川 利 行		
			みぎわ園園長 芹 生 哲 也		
			みぎわ園元園長 丸 山 智 枝 子		
— 讃 美 歌	38番 (故人愛唱)	—	みぎわ園元寮母長 中 西 町 子		
			ハンナ館利用者 中 尾 安 子		
讃 美 歌	495番 (故人愛唱)		—		同
終 禱			牧師 新 里 昌 平		
後 奏					
接 拶			親族代表 松 尾 凡 平		
献 花					

※ 式はご着席のまま行ないます

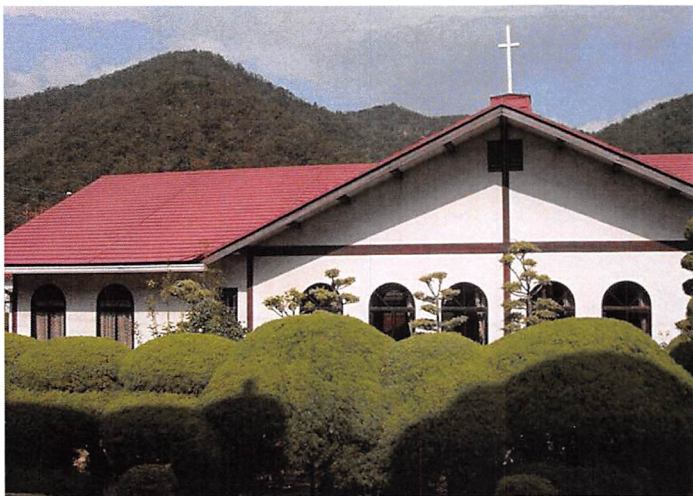
.....

禮 告・葬儀は明日午後1時より、みぎわ園3F（講堂、デイルーム）、1F（中庭）にて執り行われます



参加者は雨にも拘わらず外にまで溢れた





1 年中緑に囲まれたみぎわ教会の現会堂



〈はじめに〉

この小冊子は前半を教会主催の前夜式で語られた「偲ぶ言葉」(弔辞)を原文のまま収録し、後半には、西脇みぎわ教会創立の歴史をまとめて記載しました。(代表役員代務者 丸山智枝子姉にまとめて頂きました。)

「教会」と「みぎわ園」とは、松尾先生がその生涯を通して、この地上に遺された証しであります。社会福祉法人みぎわ会倫理綱領の冒頭には、[創立者のキリスト信仰に根ざした「奉仕と隣人愛」がその根本理念である]と明記されおります。

そこで、記念会をふたつに分け、その中で「偲ぶ会」を、みぎわ教会が内輪の会として受け持ち、福祉法人みぎわ会は来年2006年(平成18年)、先生の召天一周年に合わせて対外的な記念会を行う予定です。

今や、みぎわ教会にも、みぎわ園にも新しい時代が始まろうとしています。この時に、神は私たちの前から突如として、創立者・松尾先生をご自分のみもとにお召しになりました。私たちはうろたえることなく、教会も、園も確かな新しい志をもって、これからの時代とどのように関わりつつ歩んでいくべきか、しっかり考え、道を定めていかねばなりません。

果たすべき務めは多く、私たちは無力である、と言い訳のうちに坐り込むことは許されません。しかし、必要な力と助けは神が与え給います。教会は「園と働き人の為に祈る」べきことを、新しい年度の勤めの第1目標に掲げました。共に神の恵みの証人(あかしびと)となってまいりましょう。

(新里記す)

「松尾周子先生—その足跡の断面—」

西脇みぎわ教会 新里昌平牧師

松尾先生が召されて今日で130日が過ぎました。「去る者は日々に疎し」と申しますが、園の創設者であり園全体にとってあまりにも大きな存在であった為でしょうか、今もって「亡くなられた」とか、「もう此処にはおられない」、と云う気がいたしません。先生のお人柄は、信仰に根ざした真っ直ぐな方でいらっしゃいました。



その90年に及ぶ人生の足跡には、ひたすらに先生を召し給うた主に向かっておりました。凜としたご気性は、一つの物事に向かって、それをやり遂げる熱意を人々に感じさせ、協力する人々が周りに絶えることがなかったと言われておりました。先生の人生の途上で、どの様な経緯から聖書に出合いイエス・キリストに出合ったのか、詳しいことは聞き洩らしましたが、その後の歩を伺うと、確かにその時以来、神の御手がこの方の上に働いていたとしか思えません。

その生涯は、必ずしもこの世的な意味で、幸福、成功の人生ではありませんでした。

むしろ多くの場合、女性なるがゆえの嫌がらせ、反対、中傷、等々、挫折と悲しみを負いつつの歩みであった、と伺ったことがあります。年若くして愛する夫は軍医として応召。昭和19年（1944年）沖縄戦で戦死。戦後の大変な中を2人の幼な子をかかえて、地域医療に駆け廻っていた時代がありました。そうした日々の中で、先生の人生にかかわり、これを大きく変えて行った出会いが起こります。多くの皆さんもご存知のように1人の老女との出会いでありました。寝たきりのこの老女は、自分の汚物にまみれて、自分ではなにもすることが出来ない状態でありました。更に、ひと言も口をききません。自分の苦しさや惨めさ、また助けなき状態に放置している家族や、世間に対しての不満を訴えることもできません。しかしこの老女は確かに、松尾先生の生涯を変えたのです。

私はこの話を聞くたびに思うのですが、「私には、なにも出来ない、力もない、才能もない」などとボヤいています。しかしなにも出来ない人生のように思えても、そこに神の御手が働くならば、大きな事が起こり得るということをお教えされるのです。

先きに松尾先生は悲しみの人であったと申しましたが、決して暗い印象を人に与えることはありませんでした。むしろいつでもお目に懸る度に、明るい色調の服をお召しになておられ、明るい声でよくお笑いになり、初対面の人でも先生と30分ほどお話をすると、すっかりファンになってしまうと云う、不思議な魅力をお持ちでした。晩年にご長男を難病で10数年間の闘病の末に、天に送ると云う悲しみを味あわれた、ということも皆様のご存知の通りです。

今年、8月6日に先生の埋骨式が行われました。お寺の本堂に隣接する松尾家の墓地の墓碑を初めて拝見したのですが、そこには

「人生辛酸多し、されど神は愛なり」

と書かれていました。

まことに松尾先生の人生そのものを表しているかのように思われました。先生の著書「私のあゆんだ道」の最後のところに「…長男が一昨年夏（1990年）急逝いたしました。言いようのない寂しさ、哀しさの中で、神様が、やっと私を安心して死ねるようにして下さったと感じました。彼に与えられた幼な子のような信仰が、私に平安を残してくれました。平気で自分の身の上ばなしの出来る自由も、また彼の励ましのように感じます。」と書かれて「私のあゆんだ道」をしめくくっておられます。

先生のあゆまれた道がどこに続いて行くのか、私達は一応知識として知っている筈です。私はその道をしっかり見極め、私もやがてその日が来たら先生が喜び勇んで行かれた天のみ国に一緒に参りたいと思います。

追憶のことば

松尾周子先生を偲んで

日本イエス・キリスト教団牧師 中川 利行

西脇市上本町の椿坂にある西脇キリスト教会牧師の中川でございます。

みぎわ園理事長、松尾周子先生が一昨夜、90年余の地上の生涯を終えられ、天父の御許に召天された事をお聞きし、心を痛め、深い哀しみと寂しさの中に陥っています。

私がみぎわ園のこと、松尾先生のお名前を知りましたのは、12年前に当地に赴任して来ました時、当時西脇教会の専任牧師であった神原祐蔵先生が毎月1度、ここ「みぎわ教会」礼拝説教の奉仕に来ておられたからです。

神原牧師のみぎわ教会での奉仕は、後にお聞きしましたところ理事長松尾先生のご好意であったとの事でした。神原先生は月1度の「みぎわ教会」での奉仕を心待ちにされ、実に嬉しそうに奉仕に出かけられる姿に接し、私は『みぎわ園』並びに、松尾先生の温かい人柄に触れた思いがしました。

又、以前毎年クリスマス・シーズンには、西脇教会・教会学校の子ども達がみぎわ園にお邪魔し、合同のクリスマス会を開いていました。

ある年の事です。クリスマス会の後に、松尾先生が私を呼び止められ、『みぎわ園』の創立時のこと、園の目的、使命等をお話になりました。

聖書の詩篇23篇1、2節のダビデの歌を引用され、「主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。」との御言葉から、園の理念と

して人が美しく清潔に生涯を終えること、特に高齢者の生涯の最期を美しいものにしたい。とのお考えで、入園者が地上にあって天国の前味、すなわち神様の側近くにある「いこいの水のほとり」での安らかな日々を過ごせるように、つまりみぎわ園は、「天国への門」ですと話され、そしてこの事のために設備の整った園を作り、運営していると目を輝かせて語って下さいました。

又、忘れることのできない感謝の思い出として、義母の事を話させて頂きます。

私の義理の母は92才にして1人暮らしをしていました。ある日、部屋で倒れ、肘を痛め途方にくれていました処、ちょうどその日、私たちは松尾先生とお会いする予定があり、母のことを話しましたところ、突然にもかかわらず先生のお計らいで、その日の内にショート・ステイの道が開かれ、入園させて頂きました。以来、召天までの1年5ヶ月間、先生始め、スタッフの皆様の実に行き届いた介護を受けることが出来ました。私個人としても深く感謝しています。

松尾先生の90年の御生涯を思い浮かべます時、マタイに福音書25章40節の聖句を思います。

「あなたがたによく言うておく、わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」

松尾先生に、このような志を与え、みぎわ園を設立し、運営へと導き、そして先生を用い生かされた主の御名を崇めます。

松尾先生を偲んで

みぎわ園園長 芹生 哲也

松尾先生、先生が本当に逝かれるなんて信じられなくて、なんてお別れを言っているのかわかりません。

先生には本当にかわいがって頂き、たくさんのことを教えていただきました。未熟で一杯ご迷惑やご心配をお掛けしました。それでも、まだまだ未熟で、もっともっと教えていただかないといけないことが山のようにあります。

先生のみぎわ園への思いは何よりも、誰よりも強く大きなものでした。それは人生を掛けて捧げられたものであり、その思いは神様へのものであったからだと思います。まさに「奉仕と隣人愛」を実践され、お年寄りを自分のことのように愛され、常に神様に感謝された先生は、「神と人に仕える人」そのものであったと思います。36年の歳月に900人近いお年寄りをみぎわ園から天国に送られたこと、感謝の中に天寿を全うされるお手伝いを第一線でされたこと、私たちはいつも感動してきました。松尾先生は常に私たちの憧れであり誇りでした。

しかし、先生の人生90年は私たちには想像もつかないほど多くの悲しみや苦しみもあったと思います。「リーダーたるものは孤独なもの、誰にも言えない苦しみや痛みに耐える強さが必要なのよ。」とよく話して下さいました。が、時には弱いところをそっと見せられることもあり、そんな先生が大好きでした。人間味に溢れ、完璧でないところも多くの方が引き寄せられる、先生の魅力であると私は思っています。

先生との思い出もたくさんあります。何度も神戸や大阪に出かけた車の中で、たくさんのお話を伺っていました。仕事のことは勿論、昔の話、文学の話、外国の話、キリスト教の話など、道中で飽きることはありませんでした。私の宝物です。

先生が36年前に創められ、多くの方々のお力と支えによって築いてこられたみぎわ園を、これからも変わることなく守っていくことが先生の願いであり、私たち職員の使命であることはわかっています。そして、時代が変わっても先生がいつもおっしゃっていた、温かい食事と、清潔なベッド、優しい介護があるみぎわ園であり続けたいと思います。また、ウォームハートとクリーンヘッドのある職員集団が、ひとつとなってみぎわブランドを守って行きたいと思います。

言葉が付きませんが、私のお別れのご挨拶と致します。先生本当にお疲れ様でした。先生がずっと待っておられた神様のそばで安らかにお眠り下さい。さようなら。

松尾理事長との思い出

みぎわ園元園長 丸山 智枝子

先生、本当のお別れの日になってしまいました。けれど今、このやさしい笑顔の写真を見るとなお更、それを現実の事として受け入れる事が出来ないのです。とても悲しく、さみしくて、つらい事実です。

昨年のお正月には私達グループの集いを皮切りに、6月は職員OBで卒寿のお祝いの時を持ちました。10月にはみぎわ園セミナーで、そして又、先生の親しい友人、ご姉妹の方々とお茶会、教会のお祝礼拝と続きましたね。「夢かとはばかりの感動とうれしさに包まれ、正に『わが生涯の最良の時』。」とお礼のお便りを頂き、次は「百寿」のお祝をしましょうね、とお約束しましたのに、こんなに早くお別れの時が来てしまいました。信じられません。

私が中学生の時、きれいな女医さんが毎週土曜の夜、聖書のお話をして下さるからとの集いのお誘いがあり、参加したのが松尾先生との出会いです。それ以来、先生は私達グループみんなのあこがれであり、尊敬する素敵な先生でした。時にはお母さんのような存在でもありました。

私達が高校生になり、河高にキリスト教の教会が、先生と、日浦のおばさんの手によって建設されました。それがこのみぎわ教会の前身です。

私は戎町で開業しておられた松尾医院をお手伝いする事になりましたが、結婚を期にしばらくは距離が開きました。しかし、みぎわ園設立時に、先生のお誘いで再び先生の所に出戻ってきました。長女が小学入学の時でした。

そして36年、県下で民間特養の第1号でしたが、私達職員は全員、特養という言葉さえも、福祉の事も何もわからない素人ばかりでした。先生が話される言葉さえも理解出来なくて不平を言ったり、反発したりしながら、それでもみんなで心を1つにして、毎日バタバタと走り廻りながらも楽しく一生懸命でした。そんな私達職員を時にはきびしく、そしてやさしく、いつくしんで育てて下さいました。

職員全員が『私の大好きな大事なみぎわ園』との思いで、利用される皆様の心安らかな日々が1日でも多い事を願いつつ、先生の後を必死について行きました。

本当になつかしく、楽しい時でしたね。先生の常に時代を先取りした発想と実行力、絶ゆまぬ研修等々でみぎわ会はこんなに大きく、県下はもとより日本にも名前が知られる施設に成長しましたが、先生は気の休まる日はなかった事と思います。でも、このみぎわ会があったから救われた、と言って下さる方はきっと多いはずです。そして残された功績は計り知れません。私達職員も国内、海外と研修の場を与えられ、みぎわ園で育てられ、成長させて頂きました。(一寸、肩のこるセミナーもありましたが…)他の職場にはない楽しい経験をさせて頂きました。ある時は衝突したり、苦しんだり、悩んだり、怒ったりした事も多くありました。足りない私故に、先生にはいろいろとご迷惑をおかけしました。どうぞおゆるし下さい。

「丸山さんと2人3脚で歩いた長い道のりは忘れません。」と、退職の時に頂いた言葉ですが、私はひたすら先生の後について走って来ただけでした。私には誰よりも大事な先生でした。

いろんな事がありましたね。つらく、悲しい事も多かったけれど、楽しく、うれしい事も又、沢山ありました。ありがとうございました。

先生を献身的に支え援け、介護して下さった満子さんが居て下さったから、つらい療養の時もきっと安心して居られた事と思います。“すべての業には時がある”と聖書には記されていますが、この時が最善の時なのでしょうか。

これからのみぎわ会も又新しい旅立ちです。「そんな事をしたら駄目よ。」と、時々は叱りに帰って来て下さい。みぎわ会の中に先生の姿が見えない事をどうしても信じる事の出来ない私です。

先生の理念を決して変える事なく、地域に根ざし、利用して下さる地域の方々の安らかな日々のお手伝いをするために、常に成長を続けるみぎわ会であるために目を光らせて下さい。そして先生の大切な大切なみぎわ会をしっかりと見守って下さい。

先生が生涯のすべてをささげ信仰を持って設立された『主は我らを緑のまきばにふさせ、いこいのみぎわに伴い給う。』みぎわ園、いずみ寮、心やさしい信仰の女性から命名されたナオミ館、ハンナ館でこれからも多くの方が、どんな時も先生の事を想い、感謝の中に平安と安らぎを得た日々を過ごされる事でしょう。ありがとうございました。

「わが喜び、わが望み、わが命の主」と仰ぎ、主がいつも共に居て、その時々になった助けで慰めて下さるからと、強い信仰をつら抜いてこられた先生。

「私はお嫁に行くのよ。」と言われていたと満子さんより聞きました。赤いドレス、スカイブルーの髪かざりがよく似合って、とても美しい

ジュンブライドです。長い間本当にお疲れ様でした。神様のふところでゆっくりお休み下さい。

まもなく私も参ります。その時は心よく迎えて下さいね。しばらくのお別れです。

何度言っても言い足りませんが本当にありがとうございました。

お別れのことば

みぎわ園元寮母長 中西 町子

松尾先生を偲んで一言話させていただきます。先生、聞いて下さいネ。

初めて先生とお会いしたのは今から35～6年前の私が高校生の時、面接に松尾医院に行った時でした。先生は白衣を着ておられ、玄関で「さあ、どうぞ。」と言ってやさしく声をかけて下さいました。その時の先生の笑顔、その言葉が面接に対する緊張感を和らげていったのを昨日の様にはっきり覚えています。先生、あの時の白衣姿、とってもかっこよかったです。

何も知らなかった18才の私が、このみぎわ園で色々と学び、教えて頂き、人間として成長出来たのは先生のおかげだと思っております。先生、本当にありがとうございました。

先生、覚えておられますか。先生と一緒にハワイのある老人ホームを見学した時、91才のおばあさんが「日本に帰りたい、日本に帰りたい。」と言って泣いておられたのをやさしく抱きかかえる様にして「そうね、帰りたいわね。」と話しかけておられるのを見て、思わず涙ぐみ、寮母という職業にまた新たな思いをしたのを覚えております。

先生のお年寄りに対してのやさしい言葉かけ、しぐさ等が私にとっての介護そのものでした。ただただ先生に感謝でした。

先生を思い出しながらアルバムを開いていますと、先生と2人でお互いサングラスをかけてツーショットの写真、なつかしく見ました。「あー、ここも行った。」「こんな事もあったなー。」と…本当に日本のあらゆる所に連

れて行ってもらってるなーと思いました。これも先生、みぎわ園のおかげだと思っております。

先生、私は先生を育ての親だと思っていますとよく言っていましたね。みぎわ園での30年間、先生、本当に幸福でした。最高でした。感謝で一杯です。

5～6年前に両親の介護をするという理由で退職してからは、なかなか先生とおあいする事が出来なくなりましたが、去年の6月と10月の先生の誕生会セミナーにお招き頂き、再会出来ました。

先生、覚えておられますか。私が先生の隣の席に座りますとすぐ私の手をそっと握って下さいました。私も思いきり握り返しました。あの時の手のぬくもり、感触、あのスキンシップが先生と交わした最後となりましたネ。忘れません。

先生、今、三平さんと天国で一緒に沢山のスキンシップしておられるでしょうネ。天国っていい所なのでしょうネ。目にうかびます。先生、足、大丈夫ですか。2人で仲良く手をつないで思う存分走って下さいネ。先生に何の恩返しも出来ないままお別れするのをお許し下さいネ。

先生、沢山の思い出を本当にありがとうございました。そして、本当に本当にお疲れ様でした。

先生、さよならはいいません。

先生といつか再会出来る日を…。

ゆっくりとお休み下さい。

私達の先生、又、母として仰ぐ

ケアハウス・ハンナ館利用者代表 中尾安子

故 松尾周子先生に捧げます。

私如き心まずしい者が選ばれ、先生にお別れの言葉を申し上げる光栄をお許し下さい。

思い出しますれば、先生とはじめてお話し申し上げましたのは、主人と私がハンナ館にお世話になりました数日後の事でございました。先生が何かの用事の為にハンナの食堂に来られました時、内田様が「此の度ハンナに入居された中尾安子さんは、神戸教会の会員です。」とおっしゃいました。先生は「まあ、あなたクリスチャンなの。ぜひぜひみぎわ教会にいらっしゃい。」とおっしゃって下さいました。私はその時「はい、有難うございます。」とお返事した様に、今でもはっきり覚えて居ります。私はその時、生意気な様ですが、はじめて見学に来た時、みぎわ教会にすっかりみせられてしまったのです。お世話になる機会を与えられたのは、実はみぎわ教会の会堂のすばらしさに心をうばわれたのでした。

私は今でも日曜毎の礼拝に、神様、イエス様、そして松尾先生がうかんで参るのです。そして『神は愛なり』の聖句が頭の中をよぎるのです。松尾先生、有難うございます。会員の皆様もきっと御熱心なクリスチャンに違いないと、その時思いました。

その後、先生と私はハンナの玄関のソファの上で信仰の話、そして教会の話、話を致し、次の日は先生のお宅の食堂で、みぎわ園設立の話、家族の話等、

又教会の設立、教会のあり方、そして先生の信仰についても色々とお聞き致しました。今想いますに、テープに取っておけばと残念でございます。だから私はみぎわ教会が大好きなのです。私にとって、みぎわ教会は心の頼りどころ、さけどころなのです。

しかし、先生の御気分のお悪い日がある様になりました。お悪い日にはちょいちょい大変な事も起こりました。お会いする度毎に御気嫌が悪く、叱られる事が多くなりました。

一度は思いもかけない事が起こったのでありました。先生が私に向かって私を叱ると云う事がありました。私はあまりの事に思わず泣き出し、走って自分の部屋に帰り、いつもの様にすぐにペンを取り、先生に手紙をしたためました。「何故あんなに人の前でお叱りになりましたか、私はさっぱりわかりません。お教え下さい。」と。すると、先生から直に自分の思い違いであり、許してと御返事が参りました。

私は、どんなにえらいお方でも思い違いはあっても、すぐに大先生があやまって下さるとは…、さすが松尾先生だと有難く思いました。松尾先生、本当に永い間のおつとめ有難うございました。

私はまだまだ短いハンナの生活ですが、未熟な私を、深い信仰を御与へ頂き、お導き下さいまして有難うございました。とても淋しいですけど、天の父なる神様、そして松尾先生が、常に天よりお導き下さる事と存じ、ハンナの皆様とも仲良く暮らして参ります。

申し遅れましたが、ハンナに美しいピアノ、又お雛様等々、又美しいみぎわの里に住いする幸を終わりに皆様と共に御礼申し上げます。本当に永い間有難うございました。

天国にて安らかにお休み下さいませ。時には天上より私達を見守って下さい。私ごとき至らぬ者がハンナを代表し、色々と申し上げました失礼を何卒お許し下さいませ。

最後に松尾先生がお建てになりました教会が、新里牧師御夫婦様はじめ、私達、老いてはおりますが皆々様と共に神様におつかえ申し、お守りさせて頂きます。

最後に松尾周子先生、安らかにお眠り下さいませ。

姉は今も我が内に在りて

元いずみ寮寮長故人妹 羽瀧園美

「寒さが続いています。信仰のよき戦いを戦って居られることと存じます。私、此度、長年の副鼻腔炎の悪化にて、3月16日西脇病院入院、17日手術を受けることになりました。主の御手に委ねて平安を頂いていますが一略— 万一の変事ありました時は 一略—。」こんな手紙が届いたのは16日の午後でした。

再々入院のある日、見舞った睡眠中の姉の表情は、今迄見た事のない、完成した人間のと云うか、たとえようのない清々しく静かで無垢なものでした。「ああ、姉のこの世での事は総べて終わったのかも。」と打たれる思いでした。その日から召される日迄、私は何をしたら良いのか、祈りつつも悶々として眠れぬ夜を続けることとなりました。

5才で養女として山間の僻地に生きる事になった私に世界子供文学全集を、成長に応じた文学本、姉の苦学中でもあった東京から、持ち方も判らぬハンドバックと云うもの…等々送り続けて呉れた事。姉が医院開業してから肝炎を患い長い床に就いた時、読書好きの姉の枕許で長い文学本を読み続けた事。又、姉と別な処で同じ神と出逢った私は、年に2回程しか逢えなかった2人で、信仰の話が夜半に及び夢中になった事。5人の姉弟の中で一番離れて住む私が特別の理解し合う仲になり、但馬の後継者であった私は姉の強い誘いにより、みぎわの里の住人となりました。

みぎわ会の事業に係ったおかげで、無智な私に姉の厳しい指導、必要な知

識と技術を得る為のチャンスは惜しみなく与えられ、命ある者、社会の仕組総てのもの、考え方視方の基本は、姉の身近に居る事で学ぶ事は限りなく続きました。特に人生の終焉の時を過される人達との日々は得難くも尊い体験でした。

みぎわ園に係る事になるに、神のご計画としか思えない準備がなされていた事が後に判り、神と姉との連携プレーなんて云えば許されないかも知れないけれど、姉の存在は私にはその様に思えました。これ等の事は眠れぬ夜も昼も繰り返し行き巡りました。

又姉は公私の別に非常に厳しい人でした。当然の事とは云え潔いことでした。そして、松尾周子なる姉は主の御許に召されました。今にして思えば余りにも潔い去り方でした。でも姉は自分のしたい事を皆やり遂げたのです。そして、主の御国なればこそ、ためらいも無く急いだと思えて来るのです。そんな人でした。如何にも姉らしいと思えます。

在りし日の総てに神の深い思召しが伺えて、一層親わしく思えてならないのです。

今は軽く笑みを浮かべた卒寿の祝いの小さな写真に向かって「姉ちゃん、お早ようさん。」と声をかけ乍ら、朝一番の急須のお茶を分け合う事から始まる1日です。好きな時に2人で向き合える近い人になり、嬉しいと真実思うのに、何故涙がにじむのでしょうか。

私の人生に素敵な体験を有難う。尊敬と感謝と親わしさを込めて、在りし日の事をさぐり続けます。



昭和26年伝道開始

昭和30年、この夢のような教会堂が建って本格的活動が始まる。

◆ 西脇みぎわ教会の流れ ◆

1951年～2005年

1951年（昭和26年）初頭、田舎の小さな町に西脇教会応援の下、熱心なクリスチャンで医師の松尾周子先生他の教会員により、日浦清子宅にて家庭集会、教会学校が始まった。

中学生を中心に小学生、高校生、その家族、近隣の人達と、次第に集会出席者が増加していき、それに伴い近隣の6町にも家庭集会が持たれるようになった。



昭和27年 クリスマス祝会

（前列右2人目 松尾先生）

昭和26年8月には社町嬉野研修所にて西脇教会神原牧師他教会員の方々のご奉仕で夏期学校が開かれ、大勢の小中学生が出席する。又ある年のクリスマスには日浦家の1室では入りきれない程の出席者となり、住吉亭（旅館）をご好意で使わせて頂き、祝会が開かれるといった感謝の2、3年が経過した。そしてその間の昭和28年、29年のペンテコステには受洗者が10名になる。

しかしこの地は交通不便な土地であり、次第に集会所を祈求する声が大きくなり、1954年（昭和29年）4月、周囲が緑の田園に敷地と建設資金が恵与され、松尾周子先生、日浦清子姉の献身的なお働きによって会堂建設が実現したが、中高生が中心の信徒であったため、多くの困難や犠牲を



昭和26年8月 夏期学校

お二人が担っていて下さったのだと成長した私達が今わかる事であるが、くわしい経過についての記録も見当たらず、お二人が天国に旅立たれた今、私達には知る由もない。

中高生は会堂の基礎作りに必要な石や砂等を河原から運んだり、外壁のペンキ塗り等、自分達で出来る事に力を合せ、やがて誕生する自分達の教会堂の姿を胸に描きつつお手伝いに励んでいたのである。そしてついに昭和30年9月緑の山裾に17坪余りの小さな可愛い教会堂が完成。美しい姿を現し、感動の竣工の時を迎えた。

やがて兵庫県知事からの宗教法人「日本基督教団滝野教会」の認定書が届き、本格的な宣教活動が始まっていく事となる。

初代の専任牧師として尾崎牧夫牧師を迎え、今井己智雄牧師、太田司郎牧師、上谷二夫牧師、渡辺建治牧師を順次迎え、教区内の主として神戸栄光教会の支援を受けながらの宣教が続く、そして信徒は夏期キャンプ、隣接教会の伝道集会、教会学校の研修集会等々に出席、主日礼拝、祈祷会、教会学校を守りながら受洗者も加えられていった。

しかし青少年中心の信徒であったために、高校進学、大学への進学、就職、結婚等により故郷を離れて行く人が多くなり、次第に限られた信徒となっていくた。

そんな時、1969年(昭和44年)滝野教会を松尾周子責任役員が西脇市に社会福祉施設「みぎわ園」を開設され、それに伴い翌1970年、滝野町から西脇市に滝野教会を移転「日本キリスト教団西脇みぎわ教会」として再出発する事になる。

西脇みぎわ教会建築の経緯は、1995年11月発行のみぎわ会だよりに松尾周子理事長が掲載された「西脇みぎわ教会会堂建築の歴史」によりその経過を知る。

「深き摂理の下で」 松尾周子

長谷川寿一先生は、昭和43年秋、私達の滝野教会へ牧師として、ご赴任下さいました。これは神戸栄光教会名誉牧師（当時）でいらっしゃる齊藤宗治先生のご紹介によりました。長谷川先生は当時65歳位でいらっしゃると思いますが、初対面の私に、「先生、私は聖書のことをお話しする他は何も出来ないのですが…」と少年のようににはにかみ乍ら仰しゃるのです。私はびっくりしてしまいました。

先生は、翌44年5月開設したみぎわ園の指導員となってお協力下さいました。開園式当日、先生は「ここが天国の門となりますように…」という祈りを以ってテープカットを祝福して下さいました。私の魂に打ち込まれたお言葉です。その時に選ばれた賛美歌90番を、私は園歌に定めさせて頂いたのです。

その夏8月、車のお好きな先生が事故を起こされ、加害者となりました。病弱でいらした奥様は、何度も神戸に足を運ばれました。先生の怪我も治癒され、事故処理も無事終わりました数日後、先生ご夫妻が私に話したいことがある、とのお申し出がありました。「先生、今度の事故で私は持っていた土地を売りました。思いがけず神戸市が高く買って下さり、沢山のお金が残りました。私達がこのみぎわ園にお招き頂いた記念に、私達は新しい施設にふさわしい会堂を捧げさせて頂きたいのですが…」とのお言葉です。その頃、古い滝野教会の移築のことなどを考えていた私は、唯あっけにとられてしまいました。傍らに居られた奥様が、そんな私にすかさず「先生、私達の申出を快くお聞き下さってありがとうございます」と仰しゃるではありませんか。この立派な教会堂はそういういきさつで私達に与えられました。

昭和45年8月15日に竣工しました。長谷川先生のお心づくしで、ヴォーリス設計社による気品ある設計です。先生のお祈りのとおり、25年間に100人に近い入所の方々が、キリストの救いを受けてこの門から天国へ旅立ってゆかれました。山根先生がきちんと作って下さいましたその名簿を見ていると、私は感謝と畏れで胸が一パイになってしまいました。

みぎわ村の真ん中に立っている美しい教会堂は、この事業のシンボルであり、私達の旗印であります。私を娘のように愛して、私が始めようとする事業に熱い祈りとお心を注いで下さった斉藤先生、その中から長谷川先生との巡り逢いがありました。そして長谷川先生によりみぎわ教会を建てて頂きました。

神様の為し給うた深い御愛と、御摂理の奇しきの証してございます。

(「みぎわ会だより第50号 1995.11.8発行」より)

この様にしてみぎわ教会は献堂された。そして施設を利用される多くの方が礼拝を守り、主の救いを信じ、主のみ許に召されていかれた。初代牧師の長谷川壽一牧師が体調を理由に退かれた後、滝野教会出身者で関西学院大学中学部宗教主事在任中の川崎正明牧師が、篠山教会星野久雄牧師の援けを受けながら主日礼拝のみの奉仕をして下さる。

主日礼拝、祈祷会等の出席者は特別養護老人ホームみぎわ園、軽費老人ホームいずみ寮の利用者で、高齢に加え車椅子利用者が多くバリアフリー構造が必要となり、1979年には増改築工事が実施され、現在の教会の姿となる。

「主は御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従ってわたしたち

に示して下さったのである。」(エペソ人への手紙第1章)

私達には計り知る事の出来ない神の愛が常に高齢者の小さなこの群れにそそがれている事を感じるのである。

1989年、日本ホーリネス教団へ転入、山根聖史牧師が就任。特別養護老人ホーム「みぎわ園」の指導員を兼務しながら「みぎわ園」利用者及び併設の軽費老人ホーム「いずみ寮」、ケアハウス「ハンナ館」利用者及び職員の宣教を使命としての宣教が続いたが、1995年、山根聖史牧師



が母教会宣教のため退任されることになり、その後、登内規夫牧師、村上ナオミ牧師、月に1度礼拝説教を担当して下さる西脇教会神原祐蔵牧師による宣教が続いた。

2001年、村上ナオミ牧師退任後は、みぎわ教会独特の諸事情により教団を離れた単立教会となり、主日礼拝担当牧師として武田克人牧師を迎える。この頃より各施設の利用者の高齢化が進み、教会に出席出来る利用者が減少して来た。松尾理事長は、みぎわ教会のこの小さな教会堂が施設の魂であり大切な場所で、みぎわ会施設の原点はここにあるとの強い信仰を持たれ

ていた。その信仰を継承していく事が私達信徒の使命である。

幸い昨年4月より神戸聖愛教会を退任された新里昌平牧師を礼拝担当牧師としてお迎えすることになり、丁度時を同じくしてみぎわ会職員を定年退職された神原かよ子姉が神学校での学びを始められ、新里牧師を助けて下さる事となる。「すべての業には時がある」との御言葉を実感するのである。

「主よ、あなたのみわざはいかに大きいことでしょう。あなたのもろもろの思いは、いとも深く、鈍い者には知ることができず、愚かな者は悟ることが出来ません」(詩篇92篇)

神のなさることは皆その時にかなって、美しく深い御旨を知るにはあまりにも小さく、鈍い者の群れですが、神様が永遠に変わり給うことのない愛といつくしめで、この小さなみぎわ教会を導いていて下さることを信じ、この施設を利用される人々が、みぎわの里で安心とやすらぎを得て、主を信じ、主によりたのんで人生のラストステージを過ごされることを祈りつつ、みぎわ教会の使命を全うしていきたい。



ペンテコステ礼拝

(長谷川壽一牧師をしのぶ)



ペンテコステ礼拝後の愛餐会

30周年記念礼拝
(日浦清子姉をしのぶ)



村上ナオミ牧師

松尾周子先生

日浦清子姉長女

川崎正明牧師

